

# 工部大学校書房掛猪俣昌武とお雇い教師ヘンリー・ダイアー

加藤 詔士

## 一、お雇い教師に見こまれた図書館人

(1)

お雇い教師、なかでも工部大学校のお雇い教師は、おおむねその道の俊才逸足がそろっていた。E・ダイヴァース (Edward Divers, 1857—1912)・J・ペリー (John Perry, 1850—1920)・W・E・ミアトン (William Edward Ayrton, 1847—1908)・J・ミルン (John Milne, 1850—1913)・J・コンドル (Josiah Conder, 1852—1920)などの諸氏である。誠実で熱心な奉職ぶりは、日本人学生に大きな感化をおよぼしたにちがいない。母国に戻ってからも、慕われつづけた教師も少なくない<sup>1)</sup>。

お雇い教師の方でも、かかわりをもった日本人のなかの、何人かの逸材に目をとめた。進んだ学問と技術を教えるために日本に招かれたお雇い教師であったが、かれらを魅了した日本人がいたということとは注目される<sup>2)</sup>。

工部省に雇われたお雇い教師で、工学寮および工部大学校の都検(教頭)であったヘンリー・ダイアー (Henry Dyer, 1848—1918)のばあいも、この人こそと目をかけ関心を示した日本人が何人かいる。

まず、識者のなかでは、福沢諭吉を「近代日本が生んだ抜群に傑出した人物」と高く評した。自著『大日本』では、「ただ教育家としてばかりでなく、西洋の思想を日本に紹介することに誰よりも積極的に尽力した著述家・思想家として、その名は長く日本人の記憶にとどめられることだろう。近代日本の昨今の出来事を理解しようと思う者は、すべからく福沢の生涯とその著作を丹念に研究すべきである」と、最大級の賛辞を呈している<sup>3)</sup>。また、グラスゴウのダイアー宅を訪問した藤田重道(工部大学校卒業生)にむかつて、福沢「先生は或る一部一科の専門学者といふ種類の学者でなく、世界有数の思想家であつて、自分の能力で、あらゆる問題を解決する実に珍らしい人物である」とか、福沢「先生の如き教育によつて人の

智徳を進め社会人類の平和に貢献するが如き人は、真に人類の恩人として貴ぶべき人である」とか評した、ということが伝えられている<sup>1)</sup>。

工部大学校の学生のなかでは、とくに田邊朔郎（一八六一—一九四四）の将来を嘱望し、「英国に來ることをお母さんに納得してもらいなさい。できるだけのことをして、君のお父さん役をやつてあげるつもりだから。」とまで激励していた<sup>2)</sup>。田邊は土木学を専攻し、明治十六（一八八三）年五月に卒業した学生である。「琵琶湖疎水工事計画」という卒業論文をまとめ、ただちに京都府御用掛となつて、琵琶湖疎水工事を担当し日本で最初の水力電気事業を創設した。のちには、京都帝国大学工科大学の教授になつてゐる<sup>3)</sup>。ダイアーを慕いつづけて、グラスゴウのダイアー宅を二度まで訪ねてゐる<sup>4)</sup>し、ダイアー死去のさい、「大阪毎日新聞」に追悼文を寄せた<sup>5)</sup>。

## (2)

工部大学校の学生だけでなく、職員の中にも、実は、ダイアーを魅了した人物がいた。一緒に渡英することを勧めたというのだから、ダイアーの執着ぶりがうかがわれる。

「ダイアー都検は特に其の才を愛し大に進展せしめんと欲し其の期満ちて正に帰国せんとするに際しては同行して渡英せんことを勧誘した」<sup>6)</sup>。

といふのである。

工部大学校職員でダイアーに見こまれたその人は猪俣昌武（一八

五四—一九一九）といつて、同校書房の職員であつた人である。猪俣は、

「書房主任として明治七年濠上の建物の図書室係より本館成るの後は中堂の書房係主任となり十九年工部大学校が文部省の所管に移りて東京大学に併合となるまで終始一貫書房係の勤務に服して居た人であつた。伶俐にして且緻密の人であつて其の所管の図書能く整頓し、而して其の各科の書籍の種別名称を熟知したるは閲覧者の驚嘆する所であつた。」<sup>7)</sup>

と伝えられている。「伶俐にして且緻密の人」であるうえに、「其の所管の図書能く整頓し、而して其の各科の書籍の種別名称を熟知したる」といふ記述が注目される。ダイアーが見こんだのも、このような人であればこそであろう。

猪俣昌武の図書館人として力量と執務ぶりに目を留めたのは、ダイアー一人ではなかつた。ダイアーのあとをついで第二代の都検（教頭）になつたE・ダイヴァースもまた、図書館人としての猪俣を賞賛している。「申報」と題した教育研究報告書のなかで、ダイヴァースは

「余ノ視察スル所ニ依レハ書房掛博物場及ヒ生徒館ノ吏員ハ孰レモ有傲ノモノニシテ就中当校ニ於テ久シク其職ニ在ル書房掛猪俣氏学生課荒尾氏ノ如キハ秀俊卓越ノ人ニシテ当校拜命ノ日ヨリ現今ニ至ルマテ終始相渝ラス孜々懇勤能ク其職務ヲ執リ尚モ怠ルヲアルヲナシ是レ余ノ最モ賞賛ニ堪ヘサル所ナリ」

と、報告している<sup>8)</sup>。書房掛として「秀俊卓越ノ人」であり、

「孜々慇懃能ク其職務ヲ執リ尚モ怠ルコトアルコトナシ」というのである。二人のお雇い教師が、それも都検（教頭）というお雇い教師の筆頭職にあつた二人が、同じように高く評したということに注目したいと思う。

## 二、工学寮および工部大学校書房掛

(1)

ダイアーが工部省のお雇い教師として招聘され、工学寮および工部大学校の都検（教頭）であつたのは、明治六（一八七三）年六月から十五（一八八二）年七月までである。その後任ダイヴァースは明治十九（一八八六）年までその職にあつた。猪俣昌武は、この間一貫して同校書房の職員であつた。

工部大学校は、当初、工学寮といつて、工部省の一等寮として設置され、「工部ニ奉職スル工業士官ヲ教育スル」<sup>19</sup>ことを主務とした。明治一〇（一八七七）年一月、官制の改革で寮が廃止され、工学寮は工作局に所属し工部大学校と名を改めることになる。明治十五（一八八二）年八月十九日には、その工作局を離れて工部省直轄となるが、十八（一八八五）年十二月十九日には、工部省の廃止にともない文部省に移管される。翌十九（一八八六）年三月一日、帝国大学令が公布されると、工部大学校は東京大学工芸学部と合併して帝国大学工科大学となつた。この間、書房がおかれ、その職員が配置された。当初は二名ないし三名、帝国大学時代になると四名の

職員が配置されたが、猪俣昌武だけは変わることなく一貫して書房の職員であつたのである<sup>20</sup>。

書房の職員として、猪俣は着実に昇進している。「官員録」によつて、工学寮および工部大学校時代の職位をまとめてみると別表のようになる。明治五（一八七二）年に職についたときは十四等出仕であつたが、徐々に等級があがり、明治一〇（一八七七）年からは七等技手補になる。ダイアーが帰国した十五（一八八二）年の五月には四等属に、翌十六（一八八三）年の十二月には三等属に、それぞれ榮進している。さらに、工部大学校が帝国大学工科大学となつ

工学寮・工部大学校における職位

	所 属	等 級
明治6年	工部省工学寮	十四等出仕
明治7年	工部省工学寮	十三等出仕
明治8年	工部省工学寮	十二等出仕
明治9年	工部省工学寮	十二等出仕
明治10年	工部省工作局	七等技手補
明治11年	工部省工作局	七等技手補
明治12年	工部省工作局	七等技手三級
明治13年	工部省工作局	六等属
明治14年	工部省工作局	四等属
明治15年	工部省工作局	四等属
明治16年	工部省大学校	三等属
明治17年	工部省大学校	三等属
明治18年	工部省大学校	三等属
明治19年	文部省帝国大学工科大学	書記判任三等

た十九（一八八六）年の七月には同大学書記となり、判任三等にまで昇進している<sup>15</sup>。

工部省に属し書房を担当した期間中、猪俣昌武の経歴において特筆すべき事項が二つある。

その一は、工学会（のちの日本工学会）の会員であったことである。工学会とは、明治十二（一八七九）年十一月に「工部大学校出身者によって結成された工学関係の学会」<sup>16</sup>であり、ダイアーの「肝煎り<sup>17</sup>で発足したものである」<sup>18</sup>が、猪俣昌武はその「准員」として登録している。工部大学校の有力者（山尾庸三など）からなる客員、あるいは工部大学校の卒業生がなる正員でもなく、工部大学校の職員らからなる准員であった<sup>19</sup>のだけでも、工学会をとおして「工部大学校の学生や卒業生と深く関わっていた」<sup>20</sup>であろうことがうかがわれる点で重要である。

その二は、書房を担当したほかに、明治十四（一八八一）年度から十八（一八八五）年度まで「教頭附書記補（Assistant Secretary）」を兼務したこと、さらには、工作局から工部大学校に所属かえになった明治十六（一八八三）年度から十八（一八八五）年度まで、入学試験の「和文英訳（Japanese into English）の試験官（examiner）」つまり出題者であったことである。この十六年度、十七年度、十八年度の『工部大学校便覧（The Calendar of the Imperial College of Engineering (Kōbu-Dai-Gakko), Tokei)』には、出題者の氏名つきで問題が収められている<sup>21</sup>。入学試験の試験官であったということは、当時のダイヴァース教頭がいうように、猪俣昌武がいかに「秀

俊卓越ノ人」であったかを裏づける点で注目される。

猪俣は、その後も図書館とかかわりをもちつづけた。明治二〇（一八八七）年十二月十四日に工科大学書記から「文科大学舎監ニ転任」<sup>22</sup>して以来、二十三（一八九〇）年十一月二日に「非職ヲ命セラル」<sup>23</sup>まで同職にあったが、その間、二十二（一八八九）年二月から帝国大学図書館管理補を兼任していたのである<sup>24</sup>。

帝国大学図書館管理補をしていたこの時期は、帝国大学図書館の「建物建築の時期」<sup>25</sup>であった。これまで法科・文科大学の校舎の二階にある教室に間借りしてきたが、新築工事に着手することになったのである。この帝国大学図書館新築にも、猪俣は関与していた。

まず第一に、かれは、「明治二十二年九月十一日に任命された四人の図書館新築設計委員のなかに教官以外では唯一加わっている」。四人の委員とは、法科大学教授で図書館管理（館長事務を執行する職名）の木下廣次、文科大学教授外山正一、法科大学教授宮崎道三郎（木下廣次のつぎの館長）、それに図書館管理補を兼任していた猪俣であった<sup>26</sup>。しかも第二に、猪俣の作成した図書館新築の図面が、同委員会の案の一つとして、同年一〇月十四日、文部省に提出されたことが特筆される。その提出文書には、「別紙図面ハ設計委員猪俣昌武之襄ニ調製候モノユヘ多少製図上ノ御参考ニモ可相成存候間添付候也」と明記されてあるという<sup>27</sup>。

明治二十五（一八九二）年八月十五日に新築成った図書館は、猪俣の図面どおりではなく、「第二次案と第三次案をもとにして作ら

れているようである」<sup>26</sup>けれども、猪俣は第一次案を作成し、それが新築案として用いられたのである。本件においても、猪俣昌武が図書館人としていかに「秀俊卓越ノ人」であつたかがうかがわれる点で重要である。

(2)

猪俣昌武は帝国大学を辞職し、大学職員を離れると、一転して実業界に進んだ。日本郵船会社に勤務している。

『日本紳士録』（交詢社）によると、同書の第一版（明治二十二）では、帝国大学「文科大学舎監」であるが、第二版（明治二十五）になると「日本郵船会社横浜支店員」とあり、以後、第十七版（大正元）において「会社員」とあるのを最後に、猪俣の名前は消えている。この間の表記は、日本郵船会社横浜倉庫員、日本郵船会社社員、日本郵船株式会社社員、日本郵船社員など区々である<sup>27</sup>。

なお、猪俣は明治五（一八七二）年からおよそ二〇年間、一貫して工学寮、工部大学校ならびに帝国大学の図書館の実務担当者として勤務したのであるが、これまでのところ、勤務校ないしは図書館一般にかかわる著述については知られていない<sup>28</sup>。

三、工部大学校写真の所蔵者・猪俣昌臧

(1)

猪俣昌武というと、『旧工部大学校史料』（昭和六）の、巻頭を飾る写真を思い浮かべるむきもあるであろう。同書は東京帝国大学五

十年記念史が編纂されるさい、旧工部大学校出身者の団体である虎乃門会が旧工部大学校史料編纂会を組織し「各方面より鋭意史料ノ蒐集ニ努メ、其史料ニ基キテ」編纂したものである<sup>29</sup>。

工部大学校の基本史料集であるこの『旧工部大学校史料』の巻頭に、同校の往時を伝える写真三〇葉が収録されており、そのなかには、ダイアーと妻マリー（Marie Euphémie Aquart Ferguson, 1848—1921）の肖像写真、工部大学校教師館の写真、さらには、W・G・ディクソン（1854—1928）、J・M・ディクソン（1856—1933）、T・グレイという三人の同校お雇い教師の肖像写真、それに工部大学校の長崎県人会員の集合写真など、希少な写真が含まれている<sup>30</sup>。いずれも工部大学校の歴史資料として貴重な写真であるが、なかでも、ダイアーの妻マリーの面影を伝える写真「別掲参照」は、おそらくこれ以外には知られていないだけに重要である。



「H. ダイアーと妻M. E. マリー」  
（『旧工部大学校史料』口絵）

しかしながら、上記の写真はいづれも「猪俣昌臧氏所蔵」とあって、同じ猪俣でも昌武ではないことに注意しなければならない。「猪俣昌臧氏所蔵」と付記されている写真は七葉あり、これは所蔵者名の明示されてある写真のうちで最多である。

前記のように、工学寮ならびに工部大学校への長期間の奉職、さらにはダイアーから渡英の誘いをうけるほどの間柄からすれば、わが猪俣昌武が提供した写真であつても何ら不自然ではないように思われる。しかも、猪俣昌武は工学会の会員（准員）となり、「工部大学校の学生や卒業生と深く関わっていた」であろうことが推測される。けれども、猪俣昌武とは別人であるとすれば、これらの写真の提供者「猪俣昌臧」とは、いったいどのような人物なのか。工部大学校の基本史料集である『旧工部大学校史料』に希少な写真をもつとも数多く寄せた人物であるだけに、探究すべき課題である。

## (2)

ダイアー夫妻の肖像写真を含む工部大学校関連写真の提供者である「猪俣昌臧」は、実は、昌武の養子・猪俣昌臧まさよし（一八八七—一九七二）であろうと考えられる。

その理由の第一は、昌臧は、後述のように、大正七（一九一八）年に猪俣家の家督を相続していることである。第二に、かれは工部大学校を前身校とする東京帝国大学工科大学機械工学科の出身であった。したがって、昌武が奉職していた工部大学校の関連資料の提供者であるのも、当然ありうることであろう。虎乃門会に設けられた旧工部大学校史料編纂会の史料提供の呼びかけに、昌臧がこたえ

たにちがいない。

しかも第三に、「猪俣昌臧氏所蔵」と付記されている写真七葉のなかに「長崎県人会」というキャプションのある写真が含まれ、その集合写真には猪俣昌武が後列中央に写っていることである。昌武は、後述のように、「肥前国長崎高野町」の出身であったのである。この「長崎県人会」という写真は「明治十八年五月二十三日撮影」と付記されているから、猪俣昌武が工部大学校書房に勤務し、同校の教頭附書記補を兼務していたころの映像ということになる。

猪俣昌臧は、東京帝国大学工科大学を明治四十四（一九一三）年に卒業すると、日本国有鉄道に職をえた機械技術者である。ちなみに、『日本紳士録』には第二十二版（大正七）から登載され、「東部鉄道管理局技手」とある。同書第二十五版（大正九）には「工部士 鉄道省技師」と出ている<sup>20</sup>。

『帝国大学出身名鑑』にも、工部局工場課に勤務する「鉄道技師」として登載され、つぎのような履歴が掲げられている。

### 「猪俣昌臧

養母	とみ	慶応元、七生、兵庫、大野肅清長女
男	昌彦	大五、六生
女	美枝	大元、一一生

従五勲五、鉄道技師、工部局工場課勤務

「君は東京府人浦川篤の三男にして明治二十年三月を以て生れ先代昌武の養子となり大正八年家督を相続す明治四十四年東京帝国大学工科大學機械工学科を卒業し鉄道院技師を経て大正九年鉄道技師に任じ經理局兼工作局勤務に補せられ同十一年米國に出張し復興局囑託となり昭和三年欧米出張を兼ねジュネーブ第十一回国際労働會議政府代表隨員を命ぜらる現時工作局工場課勤務たり家族は尚二女千板（大一一、五生）あり（横浜、神奈川、青木町澤渡谷一六二一、電本局四二五〇）」<sup>35</sup>。

昌臧は著作物を残している。管見のかぎり、二点認められる。「雑感」ならびに「英語で報告書や論文を起草する場合、注意を要する二、三の点」と題する論稿であり、いずれも『日本機械学会誌』に掲載された。

まず、「雑感」では、①アメリカの製造者にみられる「技術的獨立」、「製品に対する責任」、製品の改良・改善の努力と、②アメリカにおける機械器具の設計（「ボタン一つで自動的操作が出来る」ような設計）、家庭電化製品の發明（「レーダーの原理を応用した厨房」）という新傾向などを紹介し、いずれも「わが国工業發達のためにも取つて以つて範とするに値する」と位置づけている<sup>36</sup>。

つぎの論稿「英語で報告書や論文を起草する場合、注意を要する二、三の点」では、①「その結果……」の表現、case（場合）を受ける関係代名詞、「回転機の回転速度」や「冷却速度」の英訳などをめぐって具体的に言及したほか、②なるべく「一人称の表現を使わない方がよい」、「日本語を英語にするには終りの方から逆に訳

してゆくとよい」ことなどを指摘し、例解している。また、鉄道用語での英語と米語のつづり方の違いを例示し、「要は一つの文の中では英米のつづりなり、用語なりをできるだけ混用しないこと」を指摘している。③豊富な例を盛りこんだ「役にたつ辞書」を紹介してもいる<sup>37</sup>。

なお、猪俣昌臧もまた熱心なキリスト者であつて、前出の『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三年—一九九三年』には、かれの活動と貢獻が記されている<sup>38</sup>。

『旧工部大学史料』は、東京帝国大学の五十周年記念史編纂の一環として、同校工学部の前身である工部大学校の歴史編纂が企てられたさいに、資料の収集がはかられた成果であるのであるから、写真の提供者は同校の關係者（教職員ないし出身者）かその縁者であるうと推測されるが、たしかに猪俣昌臧は猪俣昌武の養子であり、猪俣家の相続人であつたのである。

#### 四. 猪俣昌武の英学修業

(1)

猪俣昌武はダイアーに見こまれ、ダイアーの帰國のさいに一緒に渡英することをすすめられたほどであつた。これは、図書館人としての有能ぶりがダイアーを魅了したからであらうが、それとも一つ、猪俣は若いころから英学を学び、英語をよくしたのであらうこととかかわりがあつたように思われる。

猪俣家は平戸以来の和蘭通詞であった。昌武の父昌叙、祖父源三郎（註）、曾祖父伝次右衛門（昌永）は、代々いづれも阿蘭陀通詞の役にあつた。父の昌叙（一八二六—一八七二）は父職をついで長崎奉行支配通詞（小通詞）となるが、のちに幕命により江戸に出て蕃所調所詰に転じ、通詞御用をつとめた。しかし、維新後は仕官を断つた（註）。

昌武は早くから国漢書数、さらには英語とオランダ語を習得しはじめ、一〇歳のときに阿蘭陀通詞見習いに任官する。明治維新後は下等通詞役を拝命した。そのご、明治三（一八七〇）年に上京して横浜の修文館で英学を学び、さらに大学南校に入学して英語に磨きをかけた（註）。修文館はもともとは「横浜在勤諸役人の子弟に漢学を教授する」学校として、慶応元（一八六五）年二月に開設されたが、明治三年ころ、「外国との交流が日々盛んになり、英学を学ぶ者が著しく増加し、英学校となつた」（註）。

昌武は上京して、横浜の修文館と大学南校で英学ないし英語を学んだのだけれども、父昌叙が明治四（一八七二）年に病没したことで学業を断念せざるをえなくなつたことから、工部省工学寮十四等出仕となつて、図書掛に就任したものである。

『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三年—一九九三年』には、上記のようなかれの履歴がまとめられている。再引するとつぎのとおりである。

「猪俣昌武は安政元年七月十七日、肥前国長崎高野町に生まれ  
た。父昌叙は幕府阿蘭陀通詞の役にあり、安政二年江戸表に出

府。母、里は、留守を守り三人の子供を育てたが、昌武が三歳にも満たない時、死去。その後母方、三輪家の保護のもとに成長する。立派な師のもとで、国漢書数、更に英語、蘭語を習得し、十歳で阿蘭陀通詞見習いに任官する。明治維新となり、新たに下等通詞役を拝命する。上京して勉学することを志しており、

明治三年、三カ年の修業許可を得て長崎港より米船コスタリカ号に乗船して上京。横浜の修文館で英学を学び、後、父の紹介で大学南校（東大の前身）に入学する。父の死後、家族を養う責任を負い、英語を教えながら勉学を続けたが、遂に学業を断念し、工学寮十四等出仕となり事務局図書掛に就任。その後、工科大学書記、文科大学舎監、帝国大学図書館管理補、同新築設計委員を歴任した。明治十五年、大野登美子と結婚し一男昌臧（まね）を授かる。（註）

右の記述のうち、昌武と昌臧の親子関係は正確でない。昌臧は昌武の実子ではなく養子である（註）。

## (2)

『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三年—一九九三年』に猪俣昌武の生涯と活動の記述があるのも、実は、かれは図書館人として活躍するかたわら、キリスト者としての道を歩みつづけ見事な実績を残したことによる。

帝国大学を辞職したのち、明治二十六（一八九三）年になると、信徒仲間七名で、基督教講義所（いまの伝道所）を横浜に設立している。翌明治二十七（一八九四）年には、組合教会員のほか横浜在





「猪俣昌武と登美夫人」

(『日本基督教団紅葉坂教会百年史 1893年-1993年』11頁)

住の信者も含めて、日本組合横浜基督教会を組織した。現在の日本基督教団紅葉坂教会(横浜市西区宮崎町一)の前身にあたる。以後も、執事として牧師を助けたし、「殊に会堂建築の困難な事業にあたっては、会計として、誠心誠意力を注いだ」。このような実績は『日本キリスト教歴史大事典』などに明記され、その功労が称えられている<sup>43)</sup>。

前出の『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三年—一九九三年』でも、その功績がつぎのように称えられ、肖像写真(別掲)も掲載されている。すなわち、帝国大学に勤務していた頃<sup>44)</sup>より、「番町教会に通い、D・C・グリーン及び金森通倫牧師より基督教を学び、明治二十四年三月八日同教会で金森牧師より受洗。

明治二十四年五月、日本郵船会社横浜倉庫勤務となり、一家を挙げて横浜に移る。当地に組合教会が無いことから教会設立を決し、在横浜の組合教会員と相談し、D・C・グリーン氏の協力を得て、講義所を設立した。以後執事として牧師を助け、教会のために尽くした。殊に会堂建築の困難な事業にあたっては、会計として、誠心誠意力を注いだ。」<sup>45)</sup>

しかも、同書『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三年—一九九三年』には、猪俣の晩年、とりわけ死去をめぐる詳しい記述が収められている。

「大正七年秋、流行性スペイン感冒に罹り、肺炎も併発、熱海、逗子で療養し一時小康を得たが、夏の気候不順のため病改まり、腎臓萎縮より尿毒症となり、大正八年十月六日六十六歳で死去。八日午後二時、平田義道牧師の司式により日本組合横浜基督教会で葬儀が行われた。三百人の会葬者の見守る中、久保山齋場で茶毘に附され、鶴見総持寺内、猪俣家墓地に埋葬された。」<sup>46)</sup>

猪俣昌武の死去については、地元紙『横浜貿易新報』も報じている。「猪俣昌武氏の訃」という見出しをつけたつぎのような死亡記事<sup>47)</sup>であって、「帝国大学の司書兼舎監として令名を博し」たことが特記されていることが注目される。

「曾て帝国大学の司書兼舎監として令名を博し後横浜に移りて前後廿有余年間郵船会社支店に勤務して信望厚かりし猪俣昌武氏は去る明治四十五年の春以来身を閑地に置きて氏が創立せる教会や青年会の為めに盡瘁する傍ら優遊自適平和なる晩年を送

りつ、ありしが当夏病を得て以来療養の効捗々しからず遂に六日朝市内青木町上台の自邸に於て眠るが如くして逝けり享年六十六、葬儀は明八日午後二時途中葬列を廃し伊勢町組合教会堂に於て営む由」。

なお、猪俣昌武は英学を学び英語をよくしたであろうけれども、管見のかぎり、かれが海外渡航したという記録は認められない<sup>46)</sup>。

## 五、図書館史上の猪俣昌武

猪俣昌武は、明治前半期に、工学寮、工部大学校さらには帝国大学工科大学の書房すなわち図書館の職員であった。同校図書館は日本最初の工学専門の大学図書館である。かれは、明治六（一八七三）年から二十四（一八九一）年まで一貫して同図書館の実務担当者であった。しかも、図書館管理補を兼務し、帝国大学図書館新築にも関与した。

この間、とくに注目されるのは、工学寮ならびに工部大学校時代に、ダイアーおよびダイヴァースという二人のお雇い教師から、書房掛として「秀俊卓越ノ人」であると高く評価され、賛辞がよせられたことである。なかでも、ダイアーからはかれが帰国するとき一緒に渡英することを勧められたほど見こまれた。

猪俣昌武といっても、これまで、日本の図書館史ではほとんど注目されることはなく、図書館人名事典の類いにも登場することはないうように思われる<sup>47)</sup>。滝沢正順による先駆的論文「工部大学校書房

の研究（2）」のなかで、論究されているくらいである。

本稿は、その滝沢論文に導かれながら調査研究をすすめたが、とりわけお雇い教師から「秀俊卓越の人」として高く評された図書館人であったという面に注目して考察をすすめてみた。猪俣昌武はおそらくお雇い外国人に認められた日本最初の図書館人として、没却すべきではないように思われる<sup>48)</sup>。

### [注]

- (1) H・ダイアーをはじめとして、工部大学校英語教師W・G・デイクソン（William Gray Dixon, 1854—1928）、大蔵省紙幣寮顧問A・A・シヤンド（Alexander Allan Shand, 1844?—1930）など。「実際のところ、明治初期に奉職していたあいだに多大な影響を受け、日本人の仕事仲間やかつての同僚たちを敬服して、かられとの友人関係を保った人たちは数知れずいる」。O. Checkland, "Richard Henry Brunton and the Japan Lights 1868—1876, a brilliant and abrasive engineer," *The Newcomen Society for the Study of the History of Engineering and Technology, Transactions*, Vol.63, 1991—92, p.223. O・チェックランド（加藤詔士・宮田学編訳）『日本の近代化とスコットランド』玉川大学出版部、二〇〇四、一一三頁、ほか。
- (2) たとえば、お雇いイタリヤ人教師で、工部美術学校の彫刻学教師であったV・ラグーザ（Vincenzo Ragusa, 1841—1927）

は、明治十五（一八八二）年に帰国するとき、画才を認められた清原玉（一八六一—一九三九）ら三人の日本人を随行した。パレルモに日本の伝統工芸を教える学校を設立して、かれらとその教師に任じた。隈元謙次郎『明治初期来朝伊太利亜美術家の研究』八潮書店、一九七八、第四章。木村毅編『ラグーザお玉自叙伝』恒文社、一九八〇、その他。

- (3) H. Dyer, *Dai Nippon, The Britain of the East, a Study in National Evolution*, London, Blackie & Son, 1904, p.102; H. ダイアー（平野勇夫訳）『大日本、技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像』実業之日本社、一九九九、一四五頁。

- (4) 石河幹明『福澤諭吉傳』第四卷（岩波書店、一九三二）六七〇—六七二頁より再引。

- (5) 一八八二年七月六日付の、ダイアーから田邊朔郎あての書簡。田辺家資料（京都市水道局総務課管理、琵琶湖疎水記念館蔵）より。

- (6) 富田仁編『事典 近代日本の先駆者』日外アソシエーツ、一九九五、三七六—三七七頁、ほか。

- (7) 田邊朔郎「元工部大学校都検ダイヤー先生を訪ふ」『工業の大日本』第一巻第五号（明治三十七年十二月）三〇—三十五頁。同「ダイヤー訪問記」、旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料附録』旧工部大学校史料編纂会、一九三一（旧工部大学校史料・同附録）青史社、一九七八復刻）九四—九九頁。拙稿「ヘンリー・ダイアーと田邊朔郎」『UDJ』三四〇号（二〇〇一年二月）六一—七十一頁。

- (8) 田邊朔郎「逝けるダイヤー博士 我工業界の恩師を悼む」『大阪毎日新聞』大正七年一〇月五日、三頁、『同』大正七年一〇月六日、三頁。拙稿「日英交流の推進者ヘンリー・ダイアーの墓碑銘」、日本英学史学会『英学史研究』三十六号（二〇〇三年一〇月）五十七—七十二頁所収、参照。
- (9) 曾禰達蔵「工部大学の思ひ出話」『旧工部大学校史料附録』前出、七十七頁。

- (10) 同右、七十六—七十七頁。曾禰達蔵は同校造家学の第一回卒業生（明治十二年卒）で、のちに洋風建築家として名をなした。

- (11) 「教頭ダイブス申報」『工部大学校第式年報』自明治十六年四月至明治十七年三月七十三頁（『明治初期教育関係基本資料其之三』湖北社、一九八一に再録）。滝沢正順「工部大学校書房の研究（2）」『図書館界』四〇巻三号（一九八八年九月）一二五頁。

- (12) 「工学寮学課並諸規則 明治七年二月改正」および明治十年三月改正の「工部大学校学課並諸規則」、旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料』前出、一九五頁および二二二頁所収。

- (13) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史一』東京大学出版会、昭和五十九、第二章第一節。各年度の『工部大学校便覧』にある「教職員一覧」（“Officers of the College,” in *Imperial College of Engineering, (Kobu-Dai-Gakko), Tôkei. Calendar, Session MDCCCLXXXVII-LXXXIII, Tôkei, 1882, p.15*

など)その他。滝沢正順「工部大学校書房の研究(2)」『図書館界』四〇巻三号(一九八八年九月)一二五頁。同論文は猪俣昌武に注目した最初の論文と思われる。

- (14) 『官員録』(明治六年一月、明治七年一〇月、明治八年九月、明治九年四月、明治一〇年十一月、明治十一年五月、明治十二年二月、明治十三年一〇月、明治十四年七月、明治十五年五月、明治十六年十二月、明治十七年五月、明治十八年七月、明治十九年七月)より。いずれも、寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』第二卷(寺岡書洞、昭和五十二)一三四頁、三五〇頁、四六四頁、第三卷(昭和五十二)五六六頁、二一八頁、三六六頁、五一六頁、第四卷(昭和五十四)一二九頁、三〇三頁、四九二頁、第五卷(昭和五十五)一二二頁、三二八頁、第六卷(昭和五十六)一四四頁、三六〇頁より、それぞれ再引。

(15) 『国史大辞典』第十六卷(吉川弘文館、平成四)七三二頁。

- (16) H. Dyer, *Dai Nippon*, op. cit., p.185; H・タイアー(平野勇夫訳)『大日本』前出、二二八頁。タイアーは、同書で「イギリス土木学会とスコットランド造船技術協会の会則に準じ」て、その会則を「起草した」と記している(二二八頁)。

(17) 「工学会員姓名録(明治十六年七月改正)」『工学叢誌』二十一卷(明治十六年九月)所収。ここには、客員五名、正員一六八名、准員九十七名、それに山尾庸三会長以下の役員二〇名の名前があがっている。准員の部に「麴町区中六番町三十三番地工部属 猪俣昌武」とある。滝沢正順「工部大学校書房の研究

(2)」前出、も参照。

(18) 滝沢正順、同右、一二五頁。

- (19) 明治十六年度および十八年度の入試問題には「JAPANESE INTO ENGLISH. Examiner—Mr. Inomata」、明治十七年度の入試問題には「JAPANESE INTO ENGLISH. Mr. Inomata」であるだけで、猪俣昌武と明示されていないけれども、当時の教職員のかなかに「Mr. Inomata」なる人物は、書房掛(Librarian)および教頭附書記補(Assistant Secretary)であった猪俣昌武のほかには該当者は考えられな。The Calendar of the Imperial College of Engineering, (Kobu-Dai-Gakko) Tôkei. For 1883-4, Tôkei, 1883, pp.13-15, CIV; The Calendar of the Imperial College of Engineering, (Kobu-Dai-Gakko) Tôkiô. For 1884-5, Tôkiô, 1884, pp.13-15, CXIV; The Calendar of the Imperial College of Engineering, (Kobu-Dai-Gakko) Tôkiô. For 1885-6, Tôkiô, 1885, pp.13-15, CXXII. ただし、一八八一年度の『便覧(Calendar)』のみ未見。猪俣昌武が入試試験官であったであろうことは、すでに滝沢正順「工部大学校書房の研究(2)」同右、一二六頁において指摘されている。

(20) 『工科大学明治二十年報』『工科大学年報 起明治二十年一月 止明治二十年十二月』(東京大学史史料研究会編『東京大学年報』第五卷、東京大学出版会、一九九四、三〇一頁、四九四頁より再引)。

(21) 『文科大学明治廿三年報 自明治廿三年一月 至明治廿四年十二月』(東京大学史史料研究会編『東京大学年報』第六卷、前出、五五四頁より再引)。

舎監とは「各大学学生々徒ノ身上ヲ保護シ其品行ヲ監督シ

并ニ巡視ヲ指揮シテ各大学構内ノ取締ヲ為ス」ことを職務としたが、明治三十六年には学生監と改称された（東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 資料一』東京大学、昭和五十九、三二九頁、三三七頁より再引）。

『官員録』についてみると、明治二〇年十二月版では、帝国大学文科大学の項に「書記判任二等 猪俣昌武 長崎」とあるが、明治二十一年一月版になると、帝国大学文科大学の「舎監奏任六等 飯田町三丁目二十九番地 猪俣昌武」となっている（彦根正彦編『改正官員録甲 明治廿年十二月』明治二十一年一月、博公書院、一四六丁。同『改正官員録甲 明治廿一年一月』明治二十一年一月、博公書院、一四六丁。『改正官員録甲 明治廿二年三月』（明治二十二年三月、一四九丁）の帝国大学の大学図書館の項に、つぎのようにある。

「管理 法科大学教授

従六位 木下廣次 熊本

管理補 文科大学舎監 猪俣昌武 長崎」

ただし、滝沢正順「工部大学校書房の研究（2）」（前出、一二六頁）では、明治二十四（一八九一）年一〇月まで、帝国大学図書館管理補を兼任していたとある。

なお、『官員録』の明治二十三年十月版には、帝国大学文科大学の項に、

「舎監奏任六等上 猪俣昌武 東京

工部大学校都検ヘンリー・ダイアーと猪俣昌武

駒込曙町十六番地」、

また、大学図書館の項に

「管理法科大学教授 田中稲城

管理補文科大学舎監 猪俣昌武 東京」

と記されている。その翌二十四年一月版になると、帝国大学文科大学の項に猪俣昌武の名はないが、大学図書館の項には前年と同じ記述がある（彦根正彦編『改正官員録甲 明治廿三年十二月』明治二十三年十月、前出、一四八—一四九丁。『改正官員録甲 明治廿四年一月』明治二十四年一月、前出、一四八—一四九丁）。

(23) 滝沢正順、同右、一二六頁。

(24) 滝沢正順、同右。高野彰「帝国大学図書館史（2）」『図書館界』二十九卷四号（一九七七年十一月）一五九頁。

(25) 高野彰、同右、一五九—一六〇頁。

(26) 同右、一六二頁。

(27) 『日本紳士録』第一版、交詢社、明治二十二、三十四頁。『同』第二版、明治二十五、十六頁。『同』第十七版、大正元、横浜の部二頁。

ちなみに、各版における猪俣昌武の住所はつぎのとおり。第一版（明治二十二）は東京・本郷区駒込曙町一六。第二版（明治二十五）は神奈川県久良岐郡中村一五四三。第三版（明治二十九）から神奈川県久良岐郡戸太町戸部九七〇。第八版（明治三十五）から横浜市西戸部九七〇。第十一版（明治三十九）か

ら青木町九六。滝沢正順「工部大学校書房の研究(二)」前出、一二六頁も参照。

- (28) 天野敬太郎編『図書館学関係文献目録集成——明治・大正・昭和前期編』第一卷(金沢文圃閣、二〇〇〇)。「同」第二卷(金沢文圃閣、二〇〇一)ほか参照。
- (29) 旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料』前出、緒言。
- (30) 同右、巻頭に所収。
- (31) 『東大機械同窓会名簿』第十七号(東大機械同窓会、昭和四十四)二十四頁、ほか参照。ここには、勤務先は「日本国有鉄道本社外務部」、住所は「横浜市神奈川区松ヶ丘七九」とある。本文献は、滝沢正順氏(東京大学工学部機械系三学科図書室)よりご提示いただいた。同資料を手掛かりにして、猪俣昌武と昌誠の関係を判明することができた。
- (32) 『日本紳士録』第二十二版(交詢社、大正七)東京の部十七頁。「同」第二十五版、大正九、横浜の部二頁。住所は、それぞれ「赤坂区南町四―一九」、「青木町一八六」。
- (33) 勝田一編『帝国大学出身名鑑』校友調査会、昭和七、イ―五〇頁。本文献も滝沢正順氏(前出)よりご提示いただいた。
- (34) 猪俣昌誠「雑感」『日本機械学会誌』第五十二卷第三七―一四九頁(一九四九年十一月)三八九―三九一頁。本文献ならびに次の注(35)の文献も、滝沢正順氏よりご提示いただいた。
- (35) 猪俣昌誠「英語で報告書や論文を起草する場合、注意を要する二、三の点」『日本機械学会誌』第六十三卷第四九五号(一九六〇年四月)五四七―五四九頁。
- (36) 日本基督教団紅葉坂教会百年史編集委員会編『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三年―一九九三年』日本基督教団紅葉坂教会、一九九三、十二―十五頁。猪俣昌誠「六〇年の思い出!!」昭和二十九、私家版(猪俣昌明氏蔵)。
- (37) 原平三「シーボルト事件と和蘭通詞猪俣源三郎(下)」『日本医学雑誌』一三三四号(一九四四年十二月)二八六―二八七、二九一―二九二頁。日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、一九八四、六六頁。武内博編『日本洋学人名事典』柏書房、一九九四、四九―五〇頁。
- (38) 原平三、同右。日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』六、八、十(雄松堂出版、一九九五、一九九七、一九九九)。片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』吉川弘文館、一九八五、参照。
- (39) 日本基督教団紅葉坂教会百年史編集委員会編『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三年―一九九三年』前出、一〇―十一頁。
- (40) 小玉晃一・敏子『明治の横浜、英語・キリスト教文学』笠間書院、一九七九、六六―六七頁。
- (41) 前出の注(39)に同じ。
- (42) 猪俣昌明氏(昌武のひ孫)による。
- (43) 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八、一四〇五頁。日本基督教団紅葉坂教会百年史編集委員会編『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一

八九三年—一九九三年」前出、九—十二頁。ほかに、日本基督教団紅葉坂教会編『日本基督教団紅葉坂教会六十年史』日本基督教団紅葉坂教会、一九五四、五—七頁。日本キリスト教団紅葉坂教会八十年史編集委員会編『紅葉坂教会八十年史』日本キリスト教団紅葉坂教会、一九七三、十二—十五頁も参照。

(44) 『日本紳士録』第一版(交詢社、明治二十二、三十四頁)には、「文科大学舎監」、住所は「本郷区駒込曙町十六」とある。なお、番町教会の設立は明治一九(一八八六)年。

(45) 日本基督教団紅葉坂教会百年史編集委員会編『日本基督教団紅葉坂教会百年史 一八九三年—一九九三年』前出、十一頁。

(46) 同右、十一頁。なお、横浜市鶴見区の総持寺にある猪俣家の墓地(墓域は中央二八)には、墓石一基があり、その碑面には「猪俣家之墓」、裏面には「大正七年拾月昌武建之」と彫られている。

(47) 『横浜貿易新報』大正八年一〇月七日、五面。引用にさいして、ふり仮名は省略した。

(48) 富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、一九八五。手塚晃・国立教育会館編『幕末維新海外渡航者総覧』全三巻、柏書房、一九九二、ほか参照。

(49) 「図書館人名録」、天野敬太郎編『図書館総覧』文教書院、一九五一、二一九—二二八頁所収。石井敦編『図書館を育てた人々 日本編Ⅰ』日本図書館協会、一九八三。「図書館関係専門家事典」日外アソシエーツ、一九八四。石山洋「源流から辿

る近代図書館」一—二十八、『日本古書通信』八五八号(二〇〇一年一月)〜八六二号(二〇〇四年四月)、その他。

(50) 本研究を進めるにあたり、猪俣昌明氏(昌武のひ孫)と滝沢正順氏(東京大学工学部機械系三学科図書室)には、資料の提示など、種々のご指導をいただいた。とくに滝沢正順の論文「工学部大学校書房の研究(2)」(前出)は猪俣昌武に関する最初の学術研究と思われる、本稿も同論文に負うところが大きい。記して多謝する。

(かとう しょうじ 名古屋大学教育学部)